

テーマ 「病理での遺伝子検査について～取り扱い時の疑問を解決しよう！～」

主催 病理検査研究班

実施日時：令和4年2月10日（木） 18時00分～19時00分

Web環境

点数：専門教科－20点

講演1：「遺伝子検査検体取り扱いに関するアンケート調査報告」

講師：今村 尚貴（川口市立医療センター 検査科病理検査部門）

講演2：「病理標本を用いた遺伝子検査における検体の取り扱い」

講師：熊野 義治（株式会社ビー・エム・エル総合研究所 第三検査部ゲノム検査課）

司会：岡村 卓哉（獨協医科大学埼玉医療センター 病理診断科）

参加人数：会員133名 賛助会員1名

出席した研究班班員：岡村卓哉、関口久男、森田繁、荻真里子、細沼佑介、高橋俊介、今村尚貴、小島朋子、三鍋慎也

研修内容の概要・感想など

今回は「病理での遺伝子検査について～取り扱い時の疑問を解決しよう！～」をテーマに2名の講師にご講演いただいた。

今村氏からは、埼玉県内の12施設を対象に行った遺伝子検査検体取り扱いに関するアンケート結果についてご講演いただいた。昨今の遺伝子検査の増加は、埼玉県内の施設においても同様にみられることがわかった。また、日本病理学会が推奨する「ゲノム研究用・診療用病理組織検体取扱い規程」に基づいて業務が行われており、ホルマリン濃度、固定時間の遵守、脱灰液の選択等、遺伝子検査に配慮した工夫がなされていた。その一方で、RNAをターゲットとした検査については、解析不能となる場合が散見され、固定条件等を見直す必要があることも感じられた。

熊野氏からは、遺伝子検査を委託される側の目線から、検体の取り扱いについてご講演いただいた。検体を提出する際にしばしば問題となる検体量については、腫瘍1細胞から6pgのDNAを抽出することができ、遺伝子検査には最低10ngのDNAが必要であるため、約2000個の腫瘍細胞が必要であるとのことで、今後の提出時の具体的な指標となった。

参加者からも、質問が活発に行われ、コンタミネーション（水、ピンセット、メス刃等）に関すること、標本の伸展や乾燥の影響、LBC検体での提出等、実際の現場で疑問に感じている内容が多くみられた。講師からの的確な回答がなされ、明日からの日常業務に少しでも役立てていただけるのではないかと思われた。

（文責：三鍋 慎也）